

# いぶりぶ

NO.49  
2019年 春号

開院15周年記念特別インタビュー

## いぶ腎のこれまでとこれから

ニュース

院内看護研究発表会開催

緊急用発電設備が完成

いぶ腎フレッシュマン

新人紹介



# News

院内看護研究発表会開催 2月17日(日)

第14回目となる「院内看護研究発表会」が、だて歴史の杜カルチャーセンターで行われました。今年には伊達雪まつりと日程が重なり外は賑やかな雰囲気の中、当院の看護師35名が参加しました。各部署からの発表内容は以下の通りです。

透析室では、合併症予防、生活の質を低下させないために重要な「自己管理」について、検査データ・体重増加率が良好な患者様に「自己管理への認識」について聞き取りを行いました。その結果から自己管理に大きく影響すると思われる要因の特徴と関連性を明らかにし、今後の看護支援の役割について検討しました。病棟では、新入職者の教育方法として導入している「プリセプターシップ」について、プリセプター（指導する先輩職員）がプリセプティ（新入職者）を指導する際に考え込んでしまったり、引き継ぎに多くの時間を要するという課題がありました。そこで両者が共に指導状況、進行状況を把握しやすくなるよう指導書式の見直しを行いました。

外来では、限られた時間の中で患者様と常に十分な関わりを持てるよう記録物の見直しとカンファレンスを行いました。これにより看護師間の統一した関わりにつなげることができました。

各発表後には講評と活発な意見交換もあり、有意義な一日となりました。今後も看護部の目標「専門職として主体性、自律性を持った質の高い看護サービスの提供」を指針とし、看護の質の向上を目指し努力していきたいとあらためて実感しました。

(透析室 大松澤 雅美)



緊急用発電設備が完成 3月3日(日)

昨年9月に発生した北海道胆振東部地震に伴う大規模停電（ブラックアウト）での教訓を生かし、12月に導入した緊急用発電設備の通電工事が完工し、3月3日(日)に試運転を実施しました。緊急用発電設備の完成により、今後は昨年のような大規模停電が起きた際にも全館の主要な電源を確保することができ、院内のほぼ全ての業務が遂行できるようになりました。患者様には災害時にも安心して治療を受けていただけます。

近年、自然災害が相次いで発生していますが、地域の中核を担う医療機関として、皆様に安心して安全な医療をご提供できるようこれからも努力して参ります。工事期間中のご理解とご協力に感謝申し上げます。



## いぶ腎フレッシュマン 新人紹介

放射線技師を目指したきっかけを教えてください。

放射線技師をしている親戚の話聞いて、面白い仕事だなと思ったのがきっかけです。この3月に札幌の専門学校を卒業したばかりですが、早く一人前の技師になれるよう精一杯がんばります。

趣味はありますか？

小学生の頃からサイクリングが趣味で、休日になると家族や友人とロードバイクで出かけていました。札幌から旭川

まで片道130キロほどを走ったこともあります。汗を流して走るのとても気持ちがいいです。伊達には有名なサイクリングロードがあると聞いたので、桜が咲いたら行ってみたいです。また洞爺湖一周にも挑戦したいです。

今後の抱負を聞かせてください。

先輩を見習って知識と技術をしっかりと身に付け、患者様やスタッフの皆さんに信頼される技師になりたいです。これからどうぞよろしくお願いたします。



関村 朱勇 (せきむら しゆう) 診療放射線技師

発行：いぶりぶ発行委員会

■発行/平成31年4月10日

■4月・7月・10月・1月の年4回発行

発行責任者：横井 浩

伊達市梅本町2番地15 いぶり腎泌尿器科クリニック内 TEL: 0142-21-1400  
※本誌掲載の写真・記事無断転用は固くお断りします。

「いぶりぶ」のバックナンバーは、当クリニックHPでご覧いただけます。  
<http://www.ibujin.com/>



## 編集後記

新年度がスタートしました。

当クリニックは今年7月1日で開院15周年を迎えます。

開院後3年が過ようとしていた平成19年4月に広報誌「いぶりぶ」を創刊し、この春号が49号になります。

この開院15年を機に新たな気持ちで患者様や地域の皆様にお届けしたく、誌面を一新いたしました。

しかし、開院時に掲げた理念「地域に根ざしたフットワークの良い医療」は忘れることなく、さらに進化させるよう従業員一同こころがけ、新たな一歩を踏み出します。



## 開院15周年記念特別インタビュー

### いぶ腎のこれまでとこれから



いぶり腎泌尿器科クリニックは、今年開院15周年を迎えます。2004年7月1日の開院当初より「地域に根ざしたフットワークのよい医療」を理念とし、地域の皆様のご理解とご支援をいただきながら歩んで参りました。節目の年を記念して、今号では坪俊輔院長のインタビューをお届けいたします。

#### 15年をふりかえって

クリニックを開院した当時、どのような思いがありましたか？

開院以前は、平成元年より伊達赤十字病院に勤務し、泌尿器科部長を務めていました。大学を卒業して以来、道内各地の総合病院で働いてきたのですが、総合病院というのは、医者は座っていて患者様の来院を待つような感じなんです。医師としての経験を積むにつれて、それだけではダメなのではないか、と思うようになったのです。「自分のした治療が、患者様が社会に戻ったときに本当に有効かどうかを確かめたい」と考え開業医となることを決意しました。また、当院の副院長である竹内と仲山は当時、私のもとで研修医をしていたのですが、彼らとなれば総合病院の泌尿器科にも引けを取らない質の高い診療ができるだろうと思えました。単科だけれども透析も外来も手術も全般的に網羅する病院をつくることのできる、という確信がありました。

- ・施設に来院の負担をかけない
- ・来院が必要な患者様の早期発見ができる
- ・現場で患者様がどのような環境にいるかを知ること診療に活かせる

という点にあります。人工呼吸器等のために移動が困難で専門的な医療を受けられない方にも、こちらから出向くことで診断の機会を提供することができます。この15年で当院の地域での認知度も高まり、当初思い描いていた「フットワークのよい医療」が実現できていると感じています。

時には一日の移動距離が100キロを超えることもあるんですよ。昨年の冬、大滝に出かけた時には大雪でたどり着けず、戻って来たこともありましたが、すぐに引き返したから良かったものの、あの時はもう少しで通行止になって閉じ込められてしまうところでした(笑)。

「患者様が社会に戻ったときに本当に有効な治療」とは、どのようなものでしょうか？

泌尿器科は高齢の患者様が多いので、病状だけでなく、その方の生活環境や社会的状況などを総合的に考慮して治療しなければなりません。病気を治すのが第一ですが、高齢の方と若い方とでは、病気にに対する取り組み方は当然変わってくるわけです。50代だと30年余命のある方と、85歳の方と同じ治療をするだろうか？という話ですね。

例えば、膀胱癌で膀胱を摘出した場合には、尿路変更の手術をしなければならぬのですが、ストーマをつける方法から腸管を使って代用膀胱を作製し、自分で排尿できるようにする方法まで、様々な治療法があります。しかし、長い手術をすればするほど、高齢者の場合は合併症が出るリスクが高くなってしまう。

また、保存的な治療をした場合と、アグレッシブな治療をした場合では、その後の生活にどれほどの違いがあるのか。

#### いぶ腎のこれから

この15年で変化したと感ずることはありますか？

若い頃は私よりもずっと上の世代の患者様が多かったのですが、最近では私と同年代の方や、社会や家庭での立場が同じような方のほうが多くなりました。年をとって「相手のこと(立場など)」をより実感できるようになってきたことで、以前にはあまりなかった精神的なきつさができました。よ

そういったことを考えた時に、実際にその方が社会復帰した際に「これだよかった」と思っていただけかどうかが、という観点がとても重要だと思うようになりました。

#### 『フットワークのよい医療』とは

「地域に根ざしたフットワークのよい医療」という理念に基づき、開院当初より福祉施設等への訪問診療に取り組み、現在5市町38施設へ往診を行なっていますが、この取り組みについてお聞かせください。

この地域には介護施設など福祉施設が多くあります。そういった施設を利用されている方の中には、排尿障害など泌尿器科のトラブルを抱える方が沢山います。伊達日赤時代にも施設から診察に来られる方がいましたが、通院が大変だろうな、と思っていたのです。連れて来る側にしても、数名の職員が半日から一日がかりで来るのですから時間も労力もかかります。そこで私たちが施設へ出かけていって、その場で

り共感できるようになったということですね。もしも私が同じ状況だったら、と思うと、診療の時間が時につらくなることもあります。

最後に病院のこれからについてお聞かせください。

この15年間で、病院もスタッフも本当に成熟してきたと思います。今後も基本的な方針は変わらず、地域医療の中心を担う施設としてますます努力を重ね、成長してゆきたいと考えています。

## 院長のコト

院長 坪 俊輔 (つぼしゅんすけ)

1952年7月、本別町生まれ。1980年、北海道大学医学部卒業。札幌市立病院、北大病院、函館中央病院ほか道内の大学病院を経て、1989年に伊達赤十字病院泌尿器科に着任。泌尿器科部長を務める。2004年7月に当院を開院。胆振西部医師会会長、伊達市体育協会会長。趣味は釣り、囲碁。

#### 《経歴》

- 1980年 北海道大学医学部 卒業  
北海道大学医学部泌尿器科 入局
- 1981年 札幌市立病院
- 1982年 帯広厚生病院
- 1983年 北大病院 泌尿器科
- 1984年 稚内市立病院 泌尿器科
- 1986年 函館中央病院 泌尿器科  
北大病院 泌尿器科
- 1988年 札幌北辰病院 泌尿器科
- 1989年 伊達赤十字病院 泌尿器科 泌尿器科部長